

も得て、平成17年度に設立されました。その第一回連絡会は平成18年3月24日に開催され、盛會裡に終了したと聞きます。本学出版会からは池田先生が出席予定でありましたが、3月2日に急逝なさったために、設立直後の記念すべき第一回連絡会への参加は叶いませんでした。

繰り返すまでもなく学芸大出版部連絡会は、教員養成系大学や教育学部を持つ大学の幾つかの出版会が集って設立された組織です。現状では既存の大学出版部協会などは違い、設立されて間もない萌芽期の段階にあると言えます。しかしながら、連絡会へ参加しての情報交換等は、本学出版会が存続していく上で極めて重要であることは論をまちません。加えて、本学出版会の代表として設立に際して中心的役割を果たされた池田先生の意志を引き継ぐ上でも、本学出版会が今後モアグライヴに参加する義務と責任があると考えます。

このような経緯をふまえ、第二回会合には本学出版会からは藤井健志事務局長・腰越滋事務局長が出席しました。議事は以下の通りです。

- はじめに（開会挨拶）：真下正夫代表（弘前大学出版会）
 - 第一主題：「書籍の流通と販売」北原千穂氏（玉川大学出版部、元日本出版販売株式会社取締役）
 - 第二主題：「大学出版部が目指すもの」渡邊勲氏（大学出版部連絡会顧問、元大学出版会幹事長・東大出版会専務理事）
- 以上の各主題に対して、質疑応答がなされ、盛會裡に会は終了しました。

お願ひ： 出版会費納入に關して 東京学芸大学出版会は、主に皆さまからの会費により運営されており、また非会員の方におかれましては、ご加入をご検討頂きますと幸甚至極に存じます。なお納入先郵便振替口座は、以下の通りです。

口座名：東京学芸大学出版会、口座番号：00190-5-138733（寄付金納付の場合は赤枠用紙、会費納入の場合は青枠用紙をご使用下さい）です。

ご案内： 出版会の電話番号が変わり、FAXも新設されましたのでお知らせします。ご注文は E-mail (upress@u-gakugei.ac.jp) でも承っております。また、生協でも取り扱っておりますので、ご利用下さい。現在はインターネットを利用して新しい販売方法をも検討中です。ご期待ください。

ご協力を有り難うございました ~遺児育英資金基金の御礼~

56歳で旅立たれた故池田 義人先生には、大学生、高校生、中学生の三人のお子様がいっぱしやいます。お三人が社会人として巣立られたら、奥様をはじめご遺族の方々のご負担には並々ならぬものがあるかと存じます。そのことを慮り、数字講座、全国同窓会総代会、学芸大学出版会などを中心に、遺児育英資金基金を本年6月末まで実施いたしました。先生は、出版会はもとより全国同窓会や全学に対して献身的に尽くされたこと、またその人望の故が、学内を中心に数多くの方々から寄付を頂くことが出来ました。この場を借りて、篤く御礼申し上げます。金額その他の詳細に関しましては、数字講座の方からご寄付頂いた方々へ報告して頂き、奥様に集められた募金が届けられる運びとなっております。

発起人代表(敬称略)：鷲山 恭彦、田中 祥雄、滝沢 清(代表幹事)、伊藤 一郎、荒尾 精秀、黒石 陽子

編集後記： 第5巻第2号(通巻第10号)をお届けします。今号は、編集子の独断で内容を「池田義人先生追悼号」にさせて頂き、学長先生にもご寄稿頂きました。本学出版会への池田先生のご尽力を考えると、それが許されたと判断したからであります。ただ、大幅に発行が遅れてしまい、配布も含めて夏休みに入ってからとなってしまいましたことを心よりお詫言申し上げます。ちよとお盆を迎える季節ですが、いとも夢を語り続けていた池田先生が、天国からUはしお戻り、Press News 発行を続けて下さればと、そんなことを考えます。これからも細々とではありますが、出版会の歩みをご報告すべく、これを機に改めて参ります。お一人でも多くのご賛同とご人會を頂ければ幸いです。ご支援の程、宜しくお願ひ申し上げます。(S)

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース 第5巻第2号(通巻第10号)

2006年8月1日発行

編集者：東京学芸大学出版会事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内

発行所：東京学芸大学出版会 [E-mail] upress@u-gakugei.ac.jp [Web-site] http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/

[TEL(新番号)] 042-329-7797(新) [FAX(新番号)] 042-329-7798

[本号編集担当]：筒石 賢昭(出版会編集長)、藤井 健志(事務局長)、腰越 滋(Press News担当)

第5巻 第2号 (Vol.5 No.2) 通巻 第10号
発行日 2006年8月1日
編集者 東京学芸大学出版会事務局
発行所 東京学芸大学出版会

東京学芸大学出版会 (Tokyo Gakugei University Press)
< 会報 > プレスニュース

巻頭言： 池田義人先生を偲ぶ

鷲山 恭彦 (出版会理事長・学長)

自然科学棟の前で池田先生にばったりお会いしたら、「今、出来たばかりです。フロアの話を面白かったですよ」と『辟雍』の「第2号」を手渡し下さった。「4月からいよいよ支援センターですね」というと、「実望の在り方から協力の開拓まで色々あるようですよ」といわれた。「出版会、辟雍会、そして教育実践支援センターと、先生は常に最も必要とされている場に向かう星の下に生まれているんじゃないですか」というと、「いやあ」と言われたが、期するものがあるご様子だった。

それが池田先生とお話した最後になってしまった。亡くなったのは、翌々日の朝である。悲報を聞いて茫然となった。出版会も辟雍会も、先生なくして今の形はなかったし、先生の活躍はこれからだったのに。手渡して下さった「第2号」には、「1年をふりかえる」と題した先生の文章が載っている。「組織の充実と事業の展開は互いに車の両輪、コインの表裏の関係にある」と先生の想いが沢山詰まっている。

池田先生はいつもアイングラマー林の方だった。学芸大出版会のこととは昔から構想しておられ、出来るまでの間、よくいろいろ話し合った。具体的に言った頃、「設立趣意書」を書いて欲しいといわれた。遅筆な上に発想力が不足していて中途半端なものになってきたらず、時間切れで、後は先生にお任せした。書き散らしたメモが、立派な文章にもなっていたに驚いた。

2001年11月3日に出版会は創設された。21世紀の最初の「文化の日」に誕生させたという先生の意気込みの賜物で、この日を目指して20数人の先生方が執筆して下さいました。『これからの教育と大学』も出版された。

初代事務局長として出版にはいろいろ知恵を絞られた。『折り紙と算数とコンピュータ』。資金不足を安井電子出版が又ポンスーになって出版できたものだが、池田先生にはこのように人を魅了させる力がどこかにあって、数年前の大学企画の新人生講演会に山田洋次さんに来て頂けたのも、先生の力によっていた。

(2ページに続く)



目次：

| | |
|-----------------------------------|------|
| 巻頭言： 池田義人先生を偲ぶ (鷲山 恭彦) | 1～2面 |
| ご挨拶： 事務局長の任を終えるにあたって (黒石 陽子) | 2～3面 |
| ご挨拶： 第三代会務局長として (藤井 健志) | 3面 |
| 寄稿： 大学のために 池田義人先生ご逝去を悼む (腰越 滋) | 4～6面 |
| ご紹介： 黒石陽子教授、越双六の取材で日経とNHKにご登場 | 6～7面 |
| ご報告： 平成17年度東京学芸大学出版会理事会報告 | 7～8面 |
| ご報告： 出版会会費納入と人會のお願ひ | 8面 |
| ご案内： 電話番号の変更とFAX新設 | 8面 |
| ご報告： ご協力を有り難うございました ~遺児育英資金基金の御礼~ | 8面 |

(1ページから続く)

ADAM(学習支援メディア開発研究会)も立ち上げられた。インターネットを活用したポロードバンド放送の実験授業を考えていくもので、マルチメディアと出版をつなぐ先駆的活動も展開された。これは東京外国語大学の『大学開放・社会貢献に関する調査報告書』にも紹介されている。

池田先生の温泉好きは有名だが、旅行もお好きで、大井みさほ先生の軽井沢の山荘に自然科学系の先生方が出かけた時に誘って下さった。木を切って薪にし、パーベキューをみんなで楽しんだ。その後、浅間山麓を散策し、噴火で埋まった村などを訪ねた。

軽井沢といえは、堀辰雄の『風立ちぬ』である。昔、結核で療養生活をしたことがあるので、微熱の取れない中で「風立ちぬ、いざ生さぬやも」という言葉がじんかと来たりして、この小説の雰囲気にはどこかシンパシがある。先生にそう話すと、「良い小説ですね。私も好きですよ」と言われた。「それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で・・・という出だしが、西洋的ですが新鮮だった」というと、「その後の、むくむくと湧く雲の描写がいいでしょう」と先生は言われた。

「遙か彼方の、緑だけ黄色を帯びた入道雲のむくむくとした塊りに覆われている地平線」を主人公が眺め、「ようやく暮れようとして掛けているその地平線から、反対に何者が生まれ来て来つつあるかのよう・・・」と感じている箇所である。

池田先生は群馬県に生まれた。関東平野に湧く力強い夏雲を見て、そこに沢山の未来と可能性を感じながら少年時代を過ごされたのではなからうか。青雲の志という言葉があるが、その雲が湧き上がるように、先生は常に若々しい夢とロマンをお持ちだった。むくむくと湧く入道雲がびつたりの方だった。そこに予感される何物か・・・それを先生は独特のセンスでもって、確実に現実のものとしていった。

東京学芸大学出版会は創立されて今年で55年になる。池田先生の後を継いで黒石陽子先生が奮闘され、今年4月より藤井健志事務局長、筒石賢昭編集長の体制が発足した。財政的基盤や経理や税務の問題など、大学との有機的連携が重要である。黒石先生とは随分異なる検討の議論をさせて頂いた。脱皮と飛躍の基礎は固められつつある。

「アカリミアムの成果を、わかりやすい言葉で、多くの皆さんの心に届くように」一へ池田先生はよくそう言うておられた。多くの想いを残して先生は旅立たれてしまった。無念と愛惜の念は消えることはない。幾ばかでも池田先生の想いにそえるように私たちは頑張らなければならぬ。

ご挨拶： 事務局長の任を終えるにあたって

黒石 陽子(出版会前事務局長/日本語・日本文学研究講座)

去る五月二十日(土)に開催されました第4回東京学芸大学出版会理事会・総会におきまして、三年間勤めさせていただきました事務局長の任を終えることにつき、ご承認をいただきました。

平成十三年十一月三日に発足された当出版会ですが、初代事務局長に故池田義人先生が着かれ、立ち上げに大変なご尽力をなされました。その後、先生は全国同窓会の幹事長にも着任され、あまりにもご多忙であったため、出版会の事務局長は他の者になりということになりました。当時、事務局員の一入でございました私に、事務局長を勤めるようにとのお話をいただいたのは、平成十五年の二月か三月ではなかったかと記憶しております。

以来三年間、暗中模索、試行錯誤の連続の中、夢中で勤めてまいったというのが偽らざるところです。この間、出版会会員の皆様には、寛大な心でお見守りいただき、まことにありがとうございます。また事務局員の先生方、編集委員会の先生方におかれましては、多大なご尽力、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

初代事務局長でいらした池田先生は、そのお人柄から幅広い人と人とのつながりをお持ちになり、自ら出版に関する勉強を熱心になさり、多くの知識をお持ちで、非常に精力的に出版会を広げていかれようとしておられました。常に高い理想と夢をお持ちで、私はただただ圧倒されるばかりでした。私自身が事務局長として実際に勤めてみると、出版会としての組織作りをはじめとし、出版物を世に出すまでの企画・編集・制作・広告・販売、さらに税務の問題等々、いかに多くの問題があるかを知り、それらをこなしていくので精一杯でありました。池田先生が掲げられたような理想には、私の力ではとても手が届くどころではありませんでした。

唯一少しはお役に立ったかと思われることは、事務局の仕事を明確化して整理し、システム化していく上での基礎資料を示すことができたことでした。これとても事務局員の先生方のご協力、ご尽力の賜物です。大学からもプロハイアスと、ご協力をいただき、税務関係の対応も滞りなくできるよ

出席者： 鷲山恭彦、村松泰子、細江文利、長谷川正、陣内清彦、筒石賢昭、金沢育三、大井田義彰、腰越滋、坂口謙一、金子真理子、黒石陽子、回典子(敬称略)

黒石事務局長(当時)による開会の辞に続き、本学出版会理事長である鷲山恭彦学長より挨拶頂きました。議長には長谷川正理事を選出し、概略以下のような流れで議事が進行されました。

理事会報告事項(黒石事務局長)

*平成17年度の編集委員会・事務局活動状況報告(資料1)、会員登録と会費徴収の状況(資料2)より。2006年3月末日現在、会員数134名。平成17年度会費徴収額¥20,000。未納者49名)、プレス・ニューズの発行状況(資料3)、Webサイトの運営状況(資料4)、販売活動状況(資料5)、大学と出版会との関係(資料6)のそれぞれについて、資料に基づき報告が行われた。

*平成17年度の決算が報告された。(資料7~8)より。予算額¥5,592,090、決算額¥9,355,776。大竹美登利・渡辺雅之の両氏による監査済み)

*今年度の出版計画について各出版物の進捗状況が報告された。(資料9)

*今後の販売計画について 従来の販売形態の継続、新しい販売形態の模索、広告宣伝の検討の3つの観点から報告が行われた。特に については、出版会の問題点のひとつとして、販売ルートを持たないことが挙げられ、具体案として生協との提携、アマゾンとの提携、生協ネットワークとの連携、契約店舗の開拓等が報告された。(資料10)

*大学出版部連絡会の性格が説明され、合わせてこの連絡会に本学出版会として積極的に関わっていくことの意義が報告された。(資料11)

*2006年度出版会組織構成について報告された(資料12)。昨年度に比して、大学役職者の変更に伴う役割指定の副理事長・理事の一部の交代、事務局長の交代、新規事務局員の加入があったため、以下に紹介する。

組織構成

(理事長) 鷲山恭彦(東京学芸大学長)

副理事長： 渡邊健治・馬淵貞利・村松泰子(副学長)

理事： 菊池俊昭(大学事務局長)、細江文利(附属図書館長)、村枝茂治(附属学校運営参事)、木村茂光(大学院連合学校教育研究科長)、出口利定(総合教育科学系学系長)、金谷憲(人文社会科学系学系長)、長谷川正(自然科学系学系長)、金子亨(芸術・スポーツ科学系学系長)、黒石陽子、腰越滋、筒石賢昭、鳴海多恵子、藤井健志(事務局長)、湯浅佳子

(編集委員長) 筒石賢昭(理事)

編集委員： 岩田康之、大井田義彰、金沢育三、黒石陽子(理事)、腰越滋(理事)、佐藤正光、杉森伸吉、鳴海多恵子(理事)、長谷川正(理事)、藤井健志(事務局長・理事)、正木賢一(事務局)

(事務局) 藤井健志(事務局長・理事)、黒石陽子(理事)、腰越滋(理事)、坂口謙一、杉森伸吉、高敷学、正木賢一、大井田義彰(会計)、回典子(会計)、金子真理子(会計)

(監査) 大竹美登利、渡辺雅之

議事

平成18年度の課題として、黒石事務局長より 出版計画、会費徴収と会員拡充、組織運営の問題、大学と出版会との関係、他大学の出版会との連絡・連携、に関して報告された。また長谷川正理事より6番目の課題として、出版会の事務室の整備が提案された。

長谷川議長退任の後、閉会挨拶を村松副学長にいただき、閉会した。

ご報告： 大学出版部連絡会第二回会合のご報告

去る平成18年5月26日(金)15時より日本出版クラブ会館において、第二回大学出版部連絡会が開催されました。本連絡会設立の趣旨については前号(通巻第9号)においてお知らせしてある通りですが、若干補足させていただきます。本学出版会が大学出版部連絡会のメンバーに加わった直接の契機は、故池田義人先生(本学出版会前事務局長)の多大なるご尽力によるものです。大学出版部連絡会は、池田先生と弘前大学出版会などとの綿密な相談を窺った後、有限責任中間法人・大学出版部協会などのご支援など

奇立ちなどは水解させられることしばしばであった。「大学のために何かしたい」という思いが、ひしひしと伝わってきたからである。ご専門の数学の研究・教育をはじめ、専任教員の職務を全うされながら、+ 出版会や評議会のことを常に語っていらした先生を思い返すとき、或いは中国の歴史小説を組解きながら人材育成の議論につきあって下さったりした姿を振り返るとき、結局のところ私自身が先生に包まれていたのではないかと思わせられる。

「一人だと心細いから付き合っ」とよく池田先生の泣き落としにあり、不承不承で付き合っていたつもりが、最後に私の方がむきになってきていることも多々あった。ある年の賀状に「義兄弟元年にしよう」となどと先生に書かれ、「偽兄弟ではないのか?」と悪態で返しながらも、「義人だから義に生きる人なんだなあ」と、妙に納得しながら池田先生のペーペーに乗せられ、そして先生に包まれていて自分を感じていた。

このような働き方は、「情に縛らせれば流される」式で、実際「傷を舐めあって仕事をしているのではないのか?」というご指摘を頂いたこともある。しかし、最初からruleと強制力だけで出版会が設立されたことしたなら、出版会は学内に置かれた実務委員会よかつたはずなのである。

それがそうならず、予算や人材に苦しみながらも、このような形で学内にあることの意義を捉え直していきたい、というのは、本学出版会が持つpeer groupの性格は、自由結社的色彩をおびるはずであり、他の実務委員会には代え難い可能性を内包するはずだからである。

組織の位置づけの問題から、大学からの助成を受けがたい状況にある出版会の現況は厳しい。しかし、池田先生の「思い」に添えるためにも、peer group性の利を活かす必要もあるだろう。教育の文脈で自由な発想に基づきながら、人材育成・人と人との縁やかな連携・ワークショップの仕組み作りなどに向けて、新たな企画を提案・実現していくことが求められる。無論そこでイノベーションのジョブなどruleに拘束され、仕事を担わされるだけのような体制では、決してないものである。

そのように考えた時、ただ「大学のために」という無私の心で、顕彰されずに逝ってしまった畏友たる池田先生の偉大さと思う。池田先生は、急逝される前日、最後の晩餐になった私との夕食においても、「アツく新しい調子ないかねえ」と言いながら、前向きな姿勢で将来展望を語っていらつしやうた。悲観論者の私はとてもそのアツクに立ってない。だが、出版会を続ける以上、池田先生に最低限、次のように語りかけつつ活動していきたい。「先生、苦しいと書いでも構わないでねえ、次でよすかねえ、と。」

ご紹介： 黒石 陽子教授、絵双六の取材で日経とNHKにご登場！

本学出版会から復刻版が刊行された『絵双六』に関して、黒石 陽子先生が日本経済新聞社から取材を受けられました。(絵双六に見る開花の字ひ 明治期の教育に役、復刻刊行スタート J,日本経済新聞,2006年9月9日・文化欄 に掲載)。また、NHKテレビでも「明治の絵双六復刻」というテロップと共に、このトピックが紹介され(2006年4月17日(月)NHK昼ニュース→又(首都圏)、黒石先生がインタビューを受けられました。日経の記事の方を少し紹介しますと、昨今の勝ち組負け組というゲーム感覚で人生を語る文脈とは異なり、この絵双六は人の一生には多様な選択肢があると教えてくれるとの由。記事中黒石先生は、次のように語られています。「飛び双六なので、上がりへの道は一直線ではない。誰でもどんな底に落ちる可能性がある代わりに、戻る道は用意されている。かつては大人が子どもたちと遊びながら、そういう柔軟な人生のあり方、思い通りにはならない世の常を教えたのだらう。いじめ、ひきこもり、不登校といった問題に囲まれている現代こそ、子どもたちを双六で遊ばせてほしいと思う」。

ゲームといえは、ファミコンなどのデジタル化されたゲームで遊ぶ子どもたちが殆どですが、大人が見ても考えさせられる絵双六を、是非お買い求め頂ければ幸いです。お子さんに教えながら遊んでみる機会を持ってみれば、童心にかえって夢中になっている御自身に気付かれることではない。絵柄も美しくアートとしても優れています。日本の伝統文化を知ってもらう意味で、海外出張や外国からの来客へのお土産などとしてご利用頂く方法もあるかもしれません。意外に書かれると思います。(制作：双六復刻事業実行委員会、販売価格：各1,260円。東京学芸大学出版会より好評発売中！)

ご報告： 平成17年度東京学芸大学出版会理事会報告

去る平成18年5月20日(土)15:00より第一会議室にて「平成17年度 東京学芸大学出版会理事会」が開催されました。議事録に従って、概要をご報告申し上げます。

うになりました。また18年度からは企画課の事務補佐の方が出版会の仕事に関わっていただけることとなりました。今後は新事務局長であります藤井先生が、そのリーダーシップによって、出版会の新たな道を切り開いて下さることを確信しております。今後も会員の皆様には一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。三年間ありがとうございました。

ご挨拶： 第三代事務局長として 藤井 健志(出版会新事務局長/人文科学講座)

2006年5月に東京学芸大学出版会の第三代事務局長をやらせていただくことになりました。第一代事務局長は池田義人先生、第二代は黒石陽子先生である。きわめて律儀であるがゆえにエネルギーであつたお二人の後を継ぐのはたいへんなことだと思ふ。少々緊張しているのであるが、少なくともお二人、および今度出版会の業務を支えてくれた諸先生方が築き上げられたこと、築き上げようとしたことを引き継ぎ、発展させていきたいと思つている。

私は初めは出版会に参加しておらず、本格的に関わるようになったのはここ三年ぐらいのことかと思つた。それでも出版会を運営することのたいへんさは垣間見ることができた。池田先生には出版社の人や印刷会社の人たちを紹介されて池田先生の人脈に広さに驚き(ちなみに池田先生は工場で印刷現場に立ち会うこともあったのである)、出版会をやるということはどういうことかと思つたり、夏の暑い日に黒石先生にご一緒させていただいて三鷹の税務署を訪れ、税務に関する知識のなさを嘲笑された(あれは確かに嘲笑されていた)悔しい思いを抱いたりしていたのである。ちなみに私が税務署に行ったのは一度だけだが、黒石先生は何度も足を運ばれている。

人は言うかも知れない、大学の教員がそこまでやる必要はないと。しかし何もないところから出版会を生み出すという大仕事、しかも当事者にはまった利益のない大仕事を誰がやるというのだろうか。そして一旦スタートしてしまえば出版会の仕事は否応なく大学の外部の様々な人々と向き合わざるを得ない、極小の出版社とは言え、一冊の本を作るには数十万円から数百万円がかかるのであり、私達はそのお金をめぐって業者と値段の交渉をしなければならぬ。そのときに出版会や印刷工程の知識はある程度必要なのだ。小さいとは言え利益があければ、税務署に申告をして税を払わなければならない。単なる利益の申告だけではない。消費税の申告、印税にかかる著者の所得税の申告等々、様々な税務を処理しなければならないのであつて、その煩雑さは普通の教員の確定申告の比ではない。人は税理士にやってももらえばよいと言つたろうし、実際に現在はそのうしているのだが、多額のお金が動くときにまったく仕組みを知らないわけにはいかないのである。

今までのお二人の事務局長はかくもたいへんなことをやってくられたのであるが、さらにその背景にものつと地味だが欠かすことのできない仕事を担ってこられた何人かの事務局長の先生方がいる。出版会のお金を預かつて安全に管理することがどれほど神経をすり減らすことなのか、ホームページの管理や会員管理がどれほど煩雑なことであるのか等々、出版会の事務に関わったことのない方にはなかなか想像できないのではないだろうか。けれども重要なことは、どんなに頼りなげに見えてもこうした方々によって出版会が支えられ、少しずつ育ってきていることである。

最近大学の好意で出版会の業務を手伝ってくれる事務補佐員が配られ、安いお金で編集業務を担ってくれるフリーの編集者も現れた。またわざわざ出版会から書籍を出して下さった陣内晴彦先生の『東京師範学校生活史研究』は学会誌の書評の対象となり、小林正幸先生の『不登校はなぜ起るのか』で出版会独自のウェブサイトである「Jペナルティ21」シリーズのスタートもできた。ここまで来たらあと出版会を立派に育て上げるだけである。今まで出版会に投入された理想、努力、好意そして多大な時間等々を無駄にするような非効率はどうい許されぬ。出版会を一人前の出版社にすることが、これまで出版会に関わってこられた、けつして多いとは言えない人々に頼る唯一の方法である。特に初代事務局長としてたいへんな努力を費やされながら今年の3月に急逝された池田先生への。

これだけに課せられた仕事だと思つ。私も微力を尽くそうと思つているが、同時にまだまだ弱小である東京学芸大学出版会をご支援いただければ、心から念じる次第である。



寄稿：大学のために - 池田義人先生ご逝去を悼む -

腰越 滋 (教育学講座)

去る3月2日に池田 義人先生(数学講座・教授)が56歳という若さでご逝去された。余りに突然のご逝去であり、私自身もしばらくの間、茫然自失の状態であった。しかし、いつまでも沈んではかりいいては故人に喜んで頂けまい。そう思い直し、己の中の喪の仕事(grief work)を進めつつも筆を執らせて頂くことにした。

周知のように、池田先生は本学出版会の初代事務局長をお務めになられたこと、その後も全国同窓会・辞権会設立に向けて奔走され、同会においては初代幹事長を歴任されたこと等々、本学への貢献には絶大なものがある。本稿では出版会との関わりを中心に、いささか私的ではあるが、池田先生との思い出を綴りながら先生を追悼すると共に、先生が遺して下さったものについて考えてみたい。

5. 池田先生との出会い

私が本学に着任させて頂いて8年目に入った。池田先生とは学内の仕事で一緒にすることになったわけであるが、本学出版会の「設立経緯」(URL <http://www.u-gakugei.ac.jp/%7Epress/gaiyo/kei/kei.htm>)を改めて見直すすと、2001年1月11日の『これからの教育と大学』制作委員会発足が、池田先生との仕事の起点になっていったことが確認される。

『これからの教育と大学』は、岡本 靖正先生(前学長)を筆頭とする全学有志、名誉教授の方々からの寄付を募り、本学出版会立ち上げに併せる形で製作されることになった書物であったが、予算僅少・本作りは未経験ということで難航を極めた。執筆を依頼された先生方もボランティアであったため、編集にかける費用も最小限にせざるを得ず、テラ高全てに目を通したのには、池田先生と私くもいたったかもしれない。

この本の製作を契機に、以後折に触れれば、何かあると食事を共にしながら出版会の仕事を中心に相談しあう機会が増えていった。誇張を恐れずに言えば、まさに苦楽を共にするようになっていった。

5. 出版会に関して - Press News の場合 -

出版会では、事務局長が池田先生、私はたこのヒラの事務局長であった。しかも私よりも一回り以上も長上でありしやるにも拘わらず、池田先生は平身低頭な態度で接して下さった。自尊感情が屈折しているのか自信に乏しい部分のある私の欠点を見て取ってか、「そんなことはない、腰越さんは素晴らしいと励まして下さったのも池田先生である。のせられているなあと思いつつも、いつしか一緒に仕事をしていた。とはいつても、アイデアアは池田先生が出して下さり、それを私がどんな打ち込みでいくというようなやり方であった。

例えば、この Press News である。これは、本学出版会初代編集長の渡邊 健治先生(現副学長)を中心に発刊が決められたものであるが、ボランティアなるソフトをさきこちなくハンドリングしながら、第一号を私が編集した。行きがかり上、平成15年度の研修期間中を除いては自分が担当しているが、元来不器用で仕事が遅く、他の仕事が重なること、それに比べて作成が遅れ気味になること、しばしばであった。そんな時、池田事務局長から連絡が入るのである。私が Press News 遅れてすみませんなどと申し上げると、「タラ、授業が終わったから一緒にやるうか」ということになって、二人でPCの前に座り、気がつくど編集があつたという間に終了していることが度々あった。

これは池田先生の最大の持ち味であったと思う。何人かの先生からお伺いしたことがあるが、要するに池田先生にささやかれると、「やる気になる」のである。現に私も、寄り添うような形でアイデアをどんどん出しながら「ナハイ！」と笑っている先生を見て、「社長がないなあー」などと言いつつ、進んでPCに向かっていた。そして「そう、それぞれ、流石、腰越さん！」などとおたてられるとひとまりも無い。結局喜んで編集している自分かいたのである。

このようなホットラインは、実は前号のPress News 9号 まで続いていた。つまり出版会事務局長から辞権会幹事長になられてからも、池田先生は出版会のことを大事に思っ下さっていた

のである。放っておくと他の仕事を溜め込み、Press News の編集作業が運々として進まなくなる私の性格をみこしてか、「次の原稿は誰に頼もうか?」「原稿は集まった? 今日一緒に作業しない?」などとおたて続けられて下さったのが、他ならぬ池田先生であった。池田先生の合い言葉は、「辞権会と出版会は、自分にとっては兄弟のようなもの」というものであった。新制大学制度発足後、学芸大学の歩みの中で、それまで無かった大学出版会と全国同窓会の設立に、実質的に関わった先生ならたはの発言であったともしえよう。無論、組織であるから両会の設立に多くの先生方のご尽力や思いがあったことは自分も承知しているつもりである。しかし、実質的な下働きを含めて、両会の設立にこれほど献身した方は恐らくいなかったのではあるまいか。池田先生ご本人は、「自分で作って、なつちやつた」とご謙遜されていたが、出版会の初代事務局長、辞権会初代幹事長は、池田先生しかいない。永久欠番である。

5. 出版会での本作りに関して

考えみると、出版会は教員による完全なボランティアで賄われている。会員である以上、会費を払い続けながらボランティアをやり、同僚の先生方に執筆をお願いする。しかし、皆さん忙しい。原稿料がゼロである以上、ボランティアが下がって当然とも思う。毎回のPress News の原稿を確保するのも大変なところであるから、本原稿となること、もっと拍車がかかると。そんなとき未熟な私は、「好きで本学で本屋稼業をやっているわけではないの!……」と、よく池田先生に愚態をついたものである。すると先生は、「出版会と辞権会に協力してくれるかどうかは、僕のインテイクターなのよ!」と笑ってつぶやきながら、また次の新しい企画を持ち込んでくるのであった。

思い出深いのは、『折り紙と算数とコンピュータ』である。これが出ると経緯も色々あって、ここでは割愛するが、池田先生の企画で私は半ば事後承諾で巻き込まれし手伝わせて頂いた。本学出版会の立き所は、予算が僅少という点であり、場合によっては自費出版を余儀なくされる。敬遠されるのも致し方ない部分も現状ではあるが、この「折り紙と算数とコンピュータ」に関しては、出版に際してはスポンサーがついた本となった。

池田先生の人を魅了するマジックも手伝い、スポンサーの安井電子出版さんが、上梓の記念として高輪フロンズで出版披露パーティーをして下さるといふ。私は授業があったので、池田先生に言われたとおり会場に遅参すると、いきなりリポートをつけられ、「挨拶して」と池田先生に言われた。会場には文科省の初等中等教育局課長(当時)がいらしていらして、「聞いてないよ〜」状態である。パーティーが終われば、大学出版部協会の幹事長を兼任されていた東大出版会専務理事(当時)のW氏から、「君たちの出版会などは、こんな豪勢なところではないかと、煉鳥屋くらいで本の上げをするべきだ」とお叱りを受け、出版業界における常識を、我々が何も持ち得ていないことを思い知らされたのであった。

その後、W氏の御指導もあって、大学出版部協会の会合にゲストと呼んで頂く機会もあり、池田先生のお伴で私も会合に参加したことがあった。大学出版部協会は、大学出版会のメジャーリーグであり、ここへの加入は金銭的負担も含め、本学出版会の現状では難しい。この状態が5年以上続いているのが実状である。

5. 大学出版部連絡会

そこで、アイデアマンの池田先生は、次なる策を立てた。それが Press News 9号でもお知らせした大学出版部連絡会である。この会は、後発でありながら飛躍的な出版点数を誇る弘前大学出版会の真下 正夫先生を代表とし、池田先生が副代表となられるはずであった会である。真下先生は、先発の本学出版会(池田先生)から設立の経緯などを聞き取られ、弘前大学出版会設立の立役者となられた方である。その真下先生と池田先生とで、出来たて若しくは弱小の大学出版会を繋ぎ、そこで3A的なコンソーシアムを作り、何れはメジャーである大学出版部協会に加入しようという戦略を立てられたのであった。池田先生は、既に本学出版会初代事務局長の任にはなかつた。にも拘わらず、実質的に出版会の設立の経緯を熟知されているということ、辞権会幹事長の職務の中、真下先生と連絡を取り合っていた。その成果物として大学出版部連絡会が設立されるに至ったのである。

5. 池田先生から学んだこと

当然のことながら、本学にも優秀な研究者である先生が多くいらつしやる。或る心ある先生曰く、「教育研究以外でこれだけ学内実務が増えることで、実務の負担に関して個々人で天地の差が出る。この差を緩和・抑制するには、専任は一定時間の一定時間を学内実務に集中する体制を義務化するしかないのではないか」との由、なるほどと思う。私自身、埋え性が無いので、事務官・技官(補佐を含む)、学生ほかあらゆる構成員の方々に支えられて大学はあつたこと知りつつも、これだけ学内実務が増えたと、元々の浅学非才も手伝って自暴自棄になってくる。「仕事は能力のある人に集まってくる」などとおたてられても焼く石に水で、よく池田先生にばやいたものである。

しかし、学部時代以来、38年間学芸大で生きてこられた池田先生にかかると、小僧に過ぎない私の